

第2号様式

令和5年11月24日

鈴鹿市議会議長  
山中 智博 様

会派名 市民の声  
代表者名 中西 大輔

### 視察研修等報告書

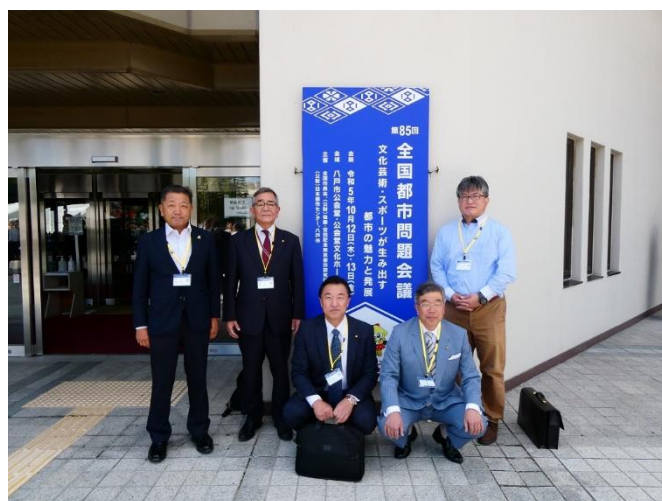
下記のとおり実施いたしましたので報告いたします。

#### 記

- 1 実施日 令和5年10月12日（木） から 10月13日（金）
- 2 参加者氏名 中西大輔 藪田啓介 田中淳一 市川昇 藤井栄治
- 3 視察先及び事項  
青森県八戸市丸之内一丁目1-1 八戸市公会堂  
第85回 全国都市問題会議 出席

#### 4 目的・内容

全国の市長や市議、学者等らが一堂に会し、都市問題や地方自治について討議する「第85回全国都市問題会議」（全国市長会・（財）後藤・安田記念東京都市研究所・（財）日本都市センター・八戸市主催）が、青森県八戸市八戸市公会堂開催されることから、議員活動の情報収集・政策立案に役立てるため、出席した。



10月12日の初日は、市長・副市長約260人を含む計約1800人が参加し、「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」をテーマに、5氏が基調講演や報告を行った。

開会式で全国市長会の立谷秀清会長（福島県相馬市長）は「災害時に自治体が市民ニーズに応えるためには、われわれが連携しながら万一来備えることが大きな課題」と呼びかけ、熊谷雄一八戸市長が歓迎のあいさつをした。

全国都市問題会議が青森県で開かれるのは、1983年の青森市以来40年ぶりである。八戸市は2020年に開催予定だったが、コロナ禍で中止となり本年の開催となった。10月13日には、4氏の事例紹介を行い、パネルディスカッションを行った。

最後に、次期開催地の清元・姫路市長から歓迎の挨拶を行った後、(公財)日本都市センターの奥山・理事から閉会の挨拶を行った。

【令和5年10月12日】

## 基調講演

### ① 東京藝術大学 学長 日比野 克彦 (アートの役割って何だろう?)

東京芸術大学の日比野克彦学長が「アートの役割って何だろう?」と題して講演。「国際博物館会議は昨年、博物館の定義を改正した。これまでの美術館は展示中心だったが、今後は地域の中でのコミュニティーの拠点と位置づけた」と述べ、多目的な巨大空間・ジャイアントルームがある八戸市美術館は交流拠点になると指摘した。

また、持続可能なSDG'sでは、17の目標が立てられているが、この中にはアートの文字は無い。日比野氏は、このSDG'sのマークを右のような絵でとらえており、それぞれのターゲットは個別ではなく混ざり合い、そこにアートがあると考えており、アートは心で繋がっていると理解していると述べた。



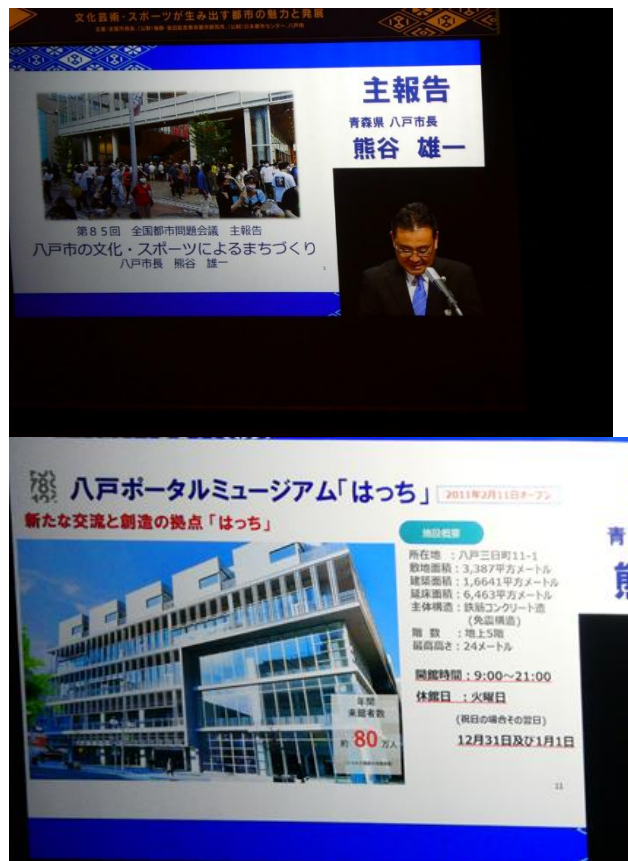
## 主報告

### ② 八戸市長 熊谷 雄一（八戸市の文化・スポーツによるまちづくり）

八戸市は、太平洋を臨む北東岸に位置し、面積は約 305km<sup>2</sup>、人口 22 万人の中核市である。市政施行は、1929 年であり、全国有数の水産都市として、また東北有数の工業都市、国際物流拠点都市として、発展を遂げてきた。

しかし、近年、旧商業地の商業機能が衰退する現象も顕著であり、「多文化都市八戸推進会議」を立ち上げ振興策を検討してきた。

その中で、市では2011年に「八戸ポータルミュージアム はっち」を文化等交流や創造の拠点として整備し、各種イベントやコミュニティスペースとして機能する「八戸まちなか広場 マチニワ」、全国初の公設書店として注目されている「八戸ブックセンター」、美術館でありながら市民交流の場となる天井高 17 メートルのジャイアントルームなど様々な機能に特化した個性的な「八戸市美術館」などを中心としたアートによるまちづくりや、スケートを中心としたスポーツ振興の取り組みを進めてきた。



このような「経験を分かち合える文化的コモンズ（共有地）の形成によりコミュニティー感覚を醸成し、そこで誘発される交流からイノベーションが生まれるきっかけになれば良い」との考えを示した。



## 一般報告

### ③ 文化事業ディレクター 吉川 由美（まちづくりの活力は地域に根ざした文化政策から育まれる）

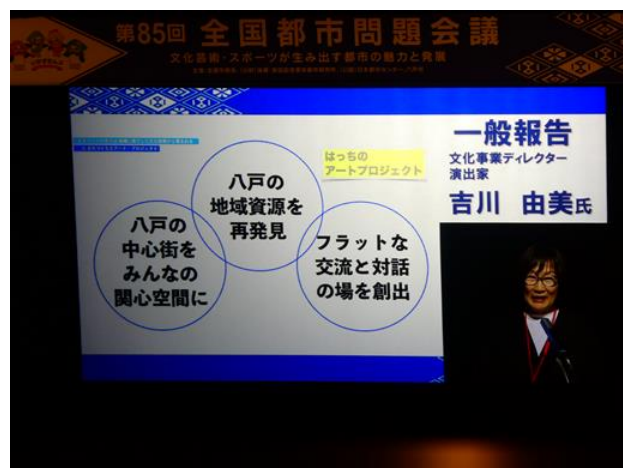
「ポータルミュージアム はっち」の開館準備から開館後のアートプロジェクトディレクターとして10年間関わってきた。

吉川氏は、八戸出身でUターン組であるが、「八戸市に戻った当初は、中心街は、どこ？」という話を若者から聞いてショックを受けたと話していた。

にぎわいの創出という特命を受けていたが、大切なことは、町の良さを探り、発信していくことであると認識させられた。そのためにも市民が主役にならなければならない。

「はっち」のアートプロジェクトとして、「八戸のうわさ」に取り組んだ。これは、商店街や事業所に取材し、個人的なエピソードを店や事業所のウィンドーなどに、写真と吹き出しをつけて貼りだすものである。このことが、人として生きてきた歴史を地域の住民が知ることに繋がる。

また、「八戸レビュー」として、88人の市民に88組の市民を取材してもらい、それぞれのエピソードを写真付きで「はっち」内に貼りだした。この重要なことは、この作業に関わる市民（400名）と共同で作り上げ





る一体感であり達成感である。

例えば、八戸市では、八戸三社大祭が真夏の4日間開催される。その祭りに出される山車（だし）に焦点をあて、「ポータルミュージアム はっち」を山車作りの拠点の一つとして市民が集い交流する場所として展開している。

「はっち」に来れば、友達ができる素晴らしい交流施設となっている。

また、2011年の東日本大震災では、多くの文化施設や資材が流されてしまった。吉川氏は、南三陸町の復興にも関わってきた。危機的な状況に置かれた中で、再生へのクリエイティブな活動を起こさせる根底は、地域社会の分母としての地域基盤（暮らしている住民）であるといえる。

「これからの文化政策は一人一人の生きる力をダイレクトに訴えることが大切」との考えを示した。

#### ④ 長野県東御市長 花岡 利夫（標高差 1,500m の地勢を活かしたスポーツ・ツーリズムの創出）

長野県東御市は、平成16年（2004年）に東部町と北御牧村の2町村が合併して誕生した市である。総面積は、112.37km<sup>2</sup> で人口29,500人前後の市である。

長野県東御市（とうみし）、日本一読みにくい市との評価もいただいている。

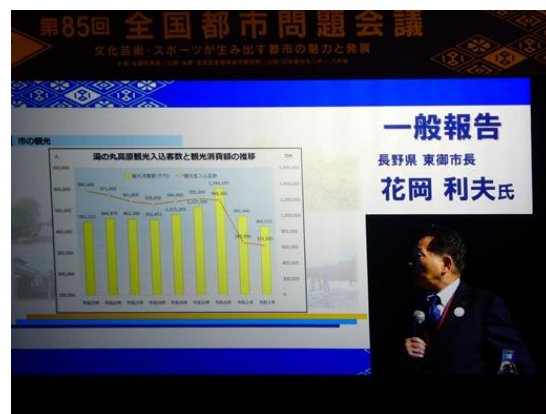
観光客数も平成25年において59万人から年々落ちてきている。

もともと、マンズワインの工場があり、ワイン用ブドウ生産も一つの産業となっている。

地域資源を活かすため、市長に就任し直ちに、ワイン特区認定を受けることができ、ブテックワイナリーといわれる小さなワイン工房が、14軒あり、あと3軒ほどできる見込み。

江戸時代から平地は、桑畑中心に開墾されてきたが、現在は、廃している桑畑を中心にワイン用葡萄の栽培が拡大している。

一方、高地を利用したトレーニング地区として取り組んでいる。この地、湯の丸は、標高1,750mであり、高地の低酸素状態における血液中の



酸素供給能力を高める点において適している。2,000mを超えると高地馴化できる人とできない人がでてくる分岐である。日本水連からの要請もあり、水泳の高地トレーニング施設の建設に取り組むこととした。市民からは、かなりの反対をいただいた。そのため市の財政投資は極力抑えた。

全天候型トラックも3レーンにするなど、経費削減に取り組み、当初建設費13億円全て寄付金を集めると宣言したが、寄付は5億円しか集まらなかった。議会も紛糾したが、私は日本のためになることをすることで、東御市が生きのこることを選択した。

この姿勢に企業も協賛いただき、寄付なり、(株)ニッスイなどは、選手用食堂の建設運営に協力いただいている。起債の8億円は、5年で返済することができた。アスリートを迎えるに際しては、アスリートを支える食事(練習後、適切なエネルギーの補充)と医科学的サポートが必要と考えている。令和元年10月にオープンした。宿舎は、2階建てで26名の選手が宿泊することができる。500m以内に、練習場・宿舎・食堂・プールを集めることができた。

今夏は、猛暑であり、陸上でも、高地トレーニングを暑さ対策として選択するチームも現れている。練習に特化しており、観客席は無い。この施設で練習した大橋悠衣選手が東京オリンピック(2021)で2つの金メダルを取得することができた。



今後は、高齢者の健康維持増進をこの施設でするように検討している。湯の丸ヒルクライムなど、ロードバイクの大会なども企画し、成果を得る広がりが出てきた。住民などの健康増進と、スポーツ・ツーリズム、ワイン・ツーリズムをどのように結び付けていくかが課題である。一層の集客に取り組んでいきたい。

標高が高く、平地が少ない地域の欠点をそのまま欠点としてとらえず、個性として認識し、資源として活用したことで、オンリーワンを獲得したと言ってよい。今後は、この施設を市民のために活用できるように検討していきたいと述べた。

## ⑤ (株)鹿島アントラーズ FC 鈴木 秀樹 (まちづくりにおけるプロスポーツクラブの有効活用)

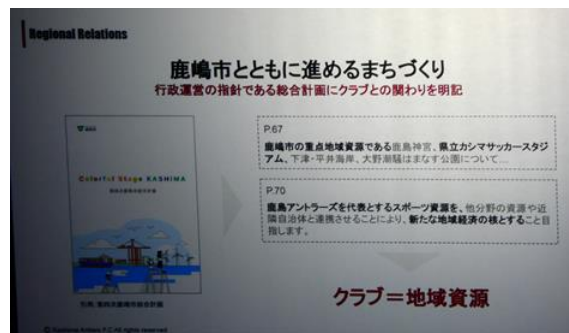
八戸市出身で八戸特派大使を務める鈴木氏は、出資を受ける地元5市(鹿嶋市・潮来市・行方市・銚田市・笠間市)から毎年職員を受け入れている。

このことが、プロスポーツと5市の小学校との食育キャンペーンを実施することや、ペットボトル再利用事業を進めるなど自治体と連携した取り組みを図ることが可能になっている。

また、鹿島アントラーズは、毎試合観客にアンケートを取っており、少なくとも千以上のアンケートを回収できている。そのアンケートに行政の依頼アンケートなども利用することができるウィンウィンの関係を構築している。

我々、プロスポーツの強みは、多くの顧客情報を収集し管理し分析する能力を持っている。それを行政の活性化に利用することに全面的に協力する姿勢でいる。

「自治体がプロスポーツの使命を理解し、地域資源として使ってくれば、互いにメリットになる。スポーツで地域を変えられる」と話した。



【令和5年10月13日】

### パネルディスカッション

◎コーディネーター

一巡した文化芸術を活用したまちづくり～自治体文化行政から魅力的なまちへ

東京大学大学院人文科学系研究科教授 小林真理

○パネラー

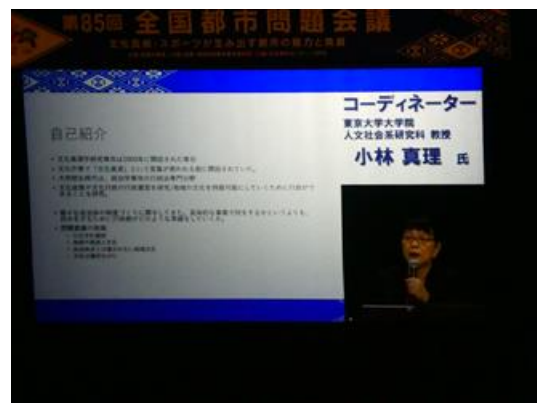
八戸の独自性が生み出してきたもの

合同会社 imajimu 代表取締役 今川 和佳子

○パネラー

地域活性化におけるスポーツの役割とその変化

拓殖大学商学部教授 松橋 崇史



○パネラー

スポーツとアニメを活用したにぎわいの創出～誇り高い沼津を目指してから～  
静岡県沼津市長 頼重 秀一

○パネラー

文化芸術・スポーツで紡ぐまち・綾部ー市民一人1文化・1スポーツの推進ー  
京都府綾部市長 山崎 善也

### 【小林真理】

地域の文化を持続可能にするために行政は何をするべきかという研究をしてきた。昨日の発表では、地域資源の重要性や文化やスポーツなどを限定的なプレイとしてとらえていない。人づくりが重要である。など、有益な発表があった。

これまでの実践を各パネラーから聞きたい。

### 【今川 和佳子】

八戸出身で、一度東京へ出てUターンで戻ってきた。ハッチの設立に関わってきた。2011年2月にオープンした。オープンの3年前から市の嘱託（コーディネーター）として採用された。「ハッチ」開業時は、箱物を造ってどうするのかと？という市民からの意見が多かった。

八戸はデコトラの発祥地であることも市民へ伝えていく活動をすすめてきた。（アートプロジェクト）アートだけが文化でなく、人とのつながり、地域資源を見直すことも文化ではないか。今回の「ハッチ」に関わり、建物を造ってから考えるのではなく、造るずっと前から市民を巻き込んだ取り組みが大変重要であると痛感している。八戸において、地域にたくさん零れ落ちている宝物を発見して市民につたえている。

酔っ払いに愛を「横丁オンリーユーシアター」を2009年から手掛けている。もともと8つの劇場があり、その周りに居酒屋等の横丁ができた経緯がある。空き店舗を中心に、パフォーマーが横丁に出て酔客と時間と空間を共有する空間である。





民族芸能も大切にしている。八戸から陸前高田までの市町村が連携し、民俗芸能を守っていくことを目指している。その成果が、三陸国際芸術祭となっている。若者に注目し、地域外の人との交流により、住民が地域の伝統文芸を見直す契機となっている。

八仙という酒の酒蔵で音楽祭なども手掛けている。

### 【松橋 崇史】

ずっと野球をしてきたが、大学ではサッカーを追いかけてきた。プロスポーツでは、地域活動に熱心な球団は、観客動員数が伸びていることがわかってきた。

1970年以降、コミュニティスポーツの推奨が言われ始めた。地方都市におけるスポーツの街が生まれ始めた。契機は国体ではないか？例えば、ホッケーの町とか。フェンシングの町「沼津」など。トップアスリートが地域に集うことが、トリガーに成りえる。

日韓ワールドカップでは、大分県の中津江村などが、好例として上げられる。



### 【頼重 秀一】

沼津市は、189,000人であり、市政100周年を迎える。都心や中京圏からも1時間少しで来ることができ、交通・産業・自然など大変恵まれた市である。

例えばフェンシングでは、東京一極集中を解消したい日本フェンシング協会と沼津市との考えが一致し、フェンシング協議会がつくられ、フェンシングの日本大会などが行われている。

また、サッカーの町として、アスルクラロ沼津のサッカーを応援している。

サイクリングアクティビティの充実を図ってきた。

沼津市総合アリーナ（香良アリーナ）で周辺プロスポーツも活動している。



ラブライブサンシャインのアクアが、この沼津市内浦地区が舞台となっている。この10年で、来訪者が20倍に増加している。

キャラクタースタンプの押印など、街歩きの取り組みを進めている。

聖地巡礼として、ファンと市民との交流が生まれている。

市のPR動画やポスターでアニメとコラボして進めており、沼津市において、ラブライブサンシャインは、切っても切れない関係になっている。



### 【山崎 善也】

綾部市は、京都府の北部であり、350km<sup>2</sup>あり、人口3万人の市である。京都や大阪、神戸から車で1時間の地理である。もともと養蚕業が中心である。企業の町でもあり、「グンゼ」やネジの「日東産業」が上場企業としてある。

文化のかおる町にすることを市政の目的の一つとしている。

合唱の町「あやべ」でもある。

小中学校で必ず、音楽祭（小学校音楽コンクール）をやっている。

市民全員が市歌を歌う会をつくっている。

今年43回目を数える「市民合唱祭」が有名である。



### 【パネルディスカッション】

小林は、1970年代後半から取り組まれた地方自治の文化行政も、50年を経て1つ1つ課題を解決しながら、ようやく都市の魅力のコアを展開するための足がかりをつかんだように見えると述べた。



## 5 成果・所感

- ✚ 人口減少は、全国で進んでおり、商業地の空洞化は、住民の意識や意欲を減退させる要因の一つである。当市高度経済成長期に大きく栄えていた神戸や白子を中心として、店を閉める件数が増えている。
- ✚ 今回文化に焦点をあてた会議ではあるが、人が集い・共有し・物事を作っていく作業を文化として取り上げている。このことは、昔から地域で自然に行われていたことである。高齢化や無関心が不活性化につながっていると気づかされた。
- ✚ 行政としては、昔の賑わいづくりのため、市内各地で仕掛けを作っていく必要がある。そのためには、人づくりが大切であり、いま進められている「まちづくり協議会」へ丸投げでなく、市としてコーディネートする必要があると感じている。
- ✚ 例えば、「鈴鹿元気花火」や「鈴鹿フェスティバル」など、民間任せで市は後援ではなく、本市が一步も二歩も前に出てきて主導するべきだと考えさせられた。
- ✚ 白子駅前の活性化や神戸商店街の活性化など、多様な主体による活性化協議会など作り、真剣にまちづくりを考える時期にきていると思う。